126. 重度訪問介護資格を活用した学生介助者の育成と継続の仕組み作り

特定非営利活動法人境を越えて　　岡部　宏生

概要

本事業は、学生介助者が自ら学生介助者を増やしフォローできる仕組みづくりの土台形成として、学生介助者の不安解消、成果共有、学びの場の提供を目的とした。そこで、全国の学生介助者と学生介助者を活用する 24 時間介助が必要な重度身体障害当事者を対象とした 1 泊 2 日のシンポジウム開催(zoom 配信にて一般公開)と講習会＆ワークショップ実施した。シンポジウムでは基調講演、全国の学生介助者とその当事者チームの紹介など学生介助者の魅力と現実を発表した。2 日目の講習会では、事前に学生介助者からよせられた医療知識、介護技術等の講座を設け学びの場を提供した。ワークショップでは、学生介助経験者、現役の熟達した介助者等がファシリテーターとなり、「関係性」「継続性」「コミュニケーション」をテーマに意見交換を行った。学生介助者は、他の学生介助者たちの学業との両立方法、介助技術について意見交換を行える場を求めていること、長時間同じ方に対して「個」で対応する仕事であることから、介助技術、コミュニケーション等についてアドバイスできる場を欲していることが分かった。一方で、他の学生介助者がいない現場で働く学生介助者と、多くの学生介助者がいる現場で働く学生介助者では学生介助者増加に向けた波及効果に差がみられ、これは学生介助者の継続の課題といえた。

背景および目的

当団体では、設立当初より重度身体障がい当事者の介助者として大学・専門学校生の短期的なアルバイトを推奨するとともに、実際に当事者、介助学生のサポート活動を実施しており、当団体のサポートにより介助アルバイトを実施した学生は、その経験を生かし、現在看護師、理学療法士、作業療法士、介護福祉士等で活躍している。

また、前述の「重度身体障がい者の暮らしカリキュラム化プロジェクト」において、医療・福祉系大学の学生に対し、当事者宅での介助体験を含むカリキュラムを実現したことにより、本プロジェクトへの参加を契機として、今後も当事者宅で介助アルバイトを実施したいという要望があり、これに応え、サポートを継続的に実施した結果、2020 年度～2022 年度にかけて約 40 名の学生介助アルバイト・ボランティアが誕生するなど、これらの取組は着実に進展を続けている。

一方、実際の介助は、当事者と介助者１対１での関わりが主となることから、自らのケア内容や接し方等の指導を受けることや、介助の中で生じた不安や疑問を解決できる場が少ないことが課題となっており、介助を始めた当初は熱心に関わっていた学生でも、当事者側の対応や他のスタッフの理解が得られず継続できなかったケースもみられるところである。

加えて、重度身体障がい当事者の介助内容は、当事者毎に個別性が高いことから、当初は当事者や先輩介助者から指示を受けながら手法を学んでいくことになるが、本来介助が必要な当事者からの指導には限界があり、その育成に苦慮しているケースも見受けられる。さらに、学生介助者が増加する一方で、その介助体制は学生の期間のみの短期的な関わりが大前提になってしまうことから、学年間での手法の継承などにより継続的に学生介助者を育成するための仕組み作りが求められている。

これらのことから、実際の介助で生じた不安や疑問などを気軽に相談し合える場の構築や、継続的に学生介助者を育成できるモデルの構築が必要不可欠であるといえる。本事業は、学生介助者が自ら学生介助者を増やしフォローできる仕組みづくりの土台形成として、学生介助者の不安解消、成果共有、学びの場の提供とした。成果として「学生介助者応援ブック」を作成し学生した。

開催実績

日時　2024 年 8 月 24 日(土)、25 日(日)
場所　ホテルグランドヒル市ヶ谷
8 月 24 日
【実施内容】学生介助者の魅力と現実を広めるシンポジウム
【参加数】会場 80 名、配信動画再生回数 214 回
8 月 25 日
【実施内容】役立つ勉強会＆悩みを深堀りするワークショップ
【参加数】　会場 57 名（学生介助者 35 名、学生介助経験者 11 名、その他 11）

図 1. 参加者らとの集合写真
シンポジウム終了後、参加者らと

まとめ

本事業は、学生介助者の魅力発信、継続のための仕組みづくりであった。介助という仕事は、決して「大変」だけがフォーカスされる仕事ではない。これは、実際に学生時代に介助経験をした学生の共通の想いである。一方で、重度障害ある当事者の方、自由に発話も叶わない方、呼吸器等の医療機器を活用している方、時としてその方の生死に直面する場合もあるのが介助であり決して「楽しい」だけでのアルバイトでもない。しかし、何十年も前から重度障害ある当事者の方を支える学生介助者は全国に必ずいて、貴重な存在となっている。制度が整わない時代、学生介助者はボランティアであったり、当事者の方が自費でアルバイト代を支払い活用していたこともあった。現在は重度訪問介護養成研修（2 日間と実地研修）をクリアすることで学生であろうと制度を活用し介助者になることができる。

基調講演１では原山あかね氏より「学生ヘルパーだった強みを生かして～橋本操さんから受け継いだこと、繋いでいくこと～」と題して今のご自身の生き方の土台となっていることを、基調講演２では照井直樹氏より「こ

れまでの福祉施策の背景と福祉に関わる若者に望みたいこと」として、学生ヘルパーが成り立つ背景要素、社会的な役割の意義をご講演いただいた。2 日目の深堀交流会では、多くの学生介助者卒業生、熟達した介助者の方をファシリテーターとし、学生介助者の悩みを引き出し、自身の体験を踏まえ、アドバイスが可能であった。

（完）